

おだいいに!

特集

■精神科新体制発足記念座談会



日本医療機能評価機構認定病院／基幹型臨床研修指定病院
公益財団法人
総合病院

浅香山病院

〒590-0018 大阪府堺市堺区今池町3丁3番16号
電話 072-229-4882(代)
<https://www.asakayama.or.jp>





伝統を礎に地域と歩む 精神科医療の未来を語る

【出席者】

- ◎名 誉 院 長：谷口 典男（前院長）
◎精 神 科 院 長：谷向 知
◎精神科副院長：須藤 良隆、田中 秀樹
釜江 和恵、正木 慶大

2026年4月谷口 典男 名誉院長就任、谷向 知 精神科院長就任にあたり「精神科新体制発足記念座談会」を開催しました。その熱気あふれる模様を、本誌独占でお届けします。

新体制に掲げる想い

司 会：2025年10月に釜江先生、正木先生が副院長に就任され、この4月には谷口前院長が名誉院長に就任、そして谷向新院長を迎えました。当院の精神科医療にとって大きな変革の時期ですが、まずは新体制への想いをお聞かせください。

須 藤：早いもので、新体制になってから3か月が過ぎましたね。私自身、当院に入職した頃の新鮮な気持ちを思い出しまして、改めて院長をしっかりサポートしていこうという気持ちです。今の精神科医療は、薬物療法の進歩や訪問看護の充実などもあり、より急性期へとシフトしています。病床数こそ減少傾向にありますが、その分、一つひとつの対応に『丁寧さと質』が問われる時代です。私は現場の声を汲み取り、組織の結束力を高める『調整役』でありたいと考えています。



田 中：確かにそうですね。名誉院長が赴任された当時（22年前）に比べ、精神科の医師数は若手を中心に倍

近くまで増えました。名誉院長のご指導のもと、救急・急性期や認知症、そして身体合併症を含め、各病棟で積極的に入院を受け入れる体制を整えてきました。ただ、ずっと内部にいると気づけない点もあると思います。ですので、経験豊かな院長には、ぜひ客観的な視点で当院のシステムを見ていただき、変えるべきところは変えていきたいと考えています。院長の目指す医療を皆で支え、患者さんに安心して治療を受けていただける体制を構築していきたいと思います。

谷 口：院長、そして4名の副院長というこの新体制には、ぜひ社会的ニーズに応える精神科医療に臨んでいただきたいと思います。特に高齢化社会の問題へ医療の立場から適切なアプローチを行ない、その受け入れ態勢の強化は急務です。連携施設とも協力しながら、安心・安全に暮らせる地域医療を築くこと。それが新体制の大きな役割だと考えています。



谷 向：治す医療はもちろんですが、それ以上に私は『その人らしく生きることを支える医療』を大切にしていきたいですね。精神科医療や認知症ケアというのは、一人の専門職だけで完結するものではありません。一般科との連携を深め、多職種が互いを尊重し合うことで、心と身体の両面を支える。多様性の時代だからこそ、患者さんはもちろん、現場の声にもしっかり耳を傾けて、温かさで専門性を両立させた病院を目指していきたいと考えています。



釜 江：私は院長とこれまで直接ご一緒した経験はございませんが、私が母校である愛媛大学から当院に赴任した後に、入れ替わる形で院長が筑波大学から愛媛大

精神科の強みと副院長チームの役割

司 会：今回の新体制では、4名の副院長がそれぞれの専門領域を担います。当院ならではのチームとしての強みや、副院長の先生方が現場で果たされる役割についてお聞かせください。

谷 向：精神科の強みというのは、病気だけを診るのではなく、その人の生活や背景、人とのつながりまで含めて支える視点があることです。認知症医療をはじめ、身体疾患や複雑な社会的課題が絡み合う今、精神科の役割はますます重要になっています。副院長チームには、それぞれの専門性を生かして診療科や多職種をつなぎ、病院全体が同じ方向を向いて進めるような舵取りを期待しています。

釜 江：おっしゃる通りですね。多職種がそれぞれの専門性を発揮しながら連携し、一般科の協力を得て包括的な診療ができる。これが当院の強みそのものです。副院長チームの役割は、各職種が専門性を十分に発揮できる環境を整えて統括すること、そして精神科と一般科の『架け橋』になること。私は認知症疾患医療センター長として、この強みを認知症医療の分野で一層発展させていくことが使命であると認識しています。

正 木：その『架け橋』という意味では、私は今、少し変則的な仕事をしています。精神科病棟では主治医として救急・急性期と身体合併症を担当しつつ、一般科でのリエゾン責任者も務めています。慢性期を全く持たないというのは精神科医として異例な姿かもしれません。元々は、日本総合病院精神医学会の専門医・指導医を取得し、施設認定を受けた際にその責任者となったためですが、



学に着任されたという経緯があり、今回、同じ職場で一緒に働くことに深いご縁を感じています。院長が愛媛大学で尽力されてこられた看護師養成や若年性認知症支援のご経験をお借りして、多職種によるチーム医療や若年性認知症支援をさらに充実させていきたいですね。



正 木：私は赴任してから9年間、名誉院長のご指導のもとで働いてきました。困ったことがあればすぐに相談させていただけたので、少し寂しい思いもありますが、これからは院長のもとで新しい体制を築いていかなければなりません。私自身も、今度は若い先生方に頼られるような存在になれるよう努めたいと思います。

やはり『総合病院』としての精神科機能を強化するために、精神科と一般科をつなげるように動いています。少し大げさな言い方かもしれませんが、「困った時には私に相談いただければ」という、両科をつなぐ役割ができればと考えています。

谷 口：そうですね。総合病院の精神科として心身両面での治療が可能であること。これこそが当院の最大のアピールポイントであり、一般科との強い連携があってこそそのものです。発症時から回復期、就労・生活支援まで『つなぎ目のない医療』を提供できている自負もあります。副院長の皆さんには、一般科との連携、ライフサイクルにおけるつなぎ目のない医療、認知症を含む老年精神疾患にその役割を果たしていただけることを期待したいと思います。

田 中：メディカルスタッフの充実ぶりも当院の誇れる点ですね。精神保健福祉士、公認心理師、作業療法士などといったメディカルスタッフが非常に多く、デイケア、作業療法やカウンセリングの体制も厚い。こうしたスタッフと協力しあえる土壌、そして身体疾患をすぐに一般科医に相談できる体制。さらに、臨床で迷ったときに副院長や上級医にすぐ相談できる『風通しの良さ』も、当院の大切な強みだと言えます。



須 藤：伝統的な丁寧さを守りつつ、これからは医師同士がより積極的に補完し合うことで、多角的な医療を実践していきたいですね。院内の多職種はもちろん、地域の医療機関との連携も、これからますます重要になってくるはずです。

6人が描く、10年後の浅香山病院

司会：最後に、本日お集まりの6名のリーダーが描く、10年後の理想像をお聞かせください。

谷向：精神科医療を基盤としながら、認知症、身体疾患、地域生活支援を切れ目なく結ぶ『地域共生型病院』として存在感を高めている姿を目指します。入院中心の医療ではなく、外来や在宅・介護や福祉との連携を強め、生活を支える医療を実践できる病院でありたいと考えています。また、多職種が互いを尊重し、若い世代が育ち、働き続けたいと思える組織文化を育むことも重要です。地域から「困ったときは浅香山病院へ」という最後の砦ではなく、困る前から有力な手段として自然に頼られ、選ばれる病院になっていることが実現されるよう目指して参ります。

釜江：私が描く理想像は、若い医師に安心して診療を託し、自身は第一線を退いている状態です。10年後に現在の世代が中心に居続けているようでは、組織の持続的発展は望めません。新研修制度のもとで当院において精神科専門医および精神保健指定医を取得した医師が中核を担い、さらにサブスペシャリティの習得に向けて研鑽を積んでいることが重要です。そのために、国内留学や大学院進学を積極的に支援し、修練後に当院へ戻り次世代の育成に携わるという『好循環』が生まれていることが、私の理想とする将来像です。

正木：その教育や医師の循環のお話にもつながりますが、浅香山病院の一番の売りはやはり『総合病院』であることだと思います。身体疾患、精神疾患の治療はもちろんのこと、精神疾患を持つ患者さんの身体治療ができ、身体治療中の精神症状も適切に評価治療できることを当然にしたいですね。将来は救急外来（一般科）にも精神科医を常駐させ、身体救急の場面で身体疾患と精神疾患の初期評価を同時に行ない、その症状に応じて一般科か精神科かを振り分けられるような体制を作っていきたいと考えています。

谷口：これからの超高齢化社会の中で、孤独ということが社会の新たな大きな問題になろうとしています。



お互いにつながりながら人を大切にする医療そのものが、将来の当院の方向を示す道しるべになると考えます。デジタル改革、AIの導入などで社会が効率化されていく中でも、温かさを求める人の心は変わりません。人が癒やされる医療を提供できる病院になっていければと考えています。

田中：名誉院長のおっしゃる通り、医学の進歩により、精神科医療においても医療機器による診断、薬物治療の進化、AIの導入などが予測されますが、私たちが大切にしている心のふれあいは変わりません。10年後も、最新の知見とともに、変わらぬ温もりが共存し、地域の方々が何かあれば迷わず当院の門を叩いて下さる、そんな『心のホームドクター』であり続けたいです。

須藤：当院の10年後、どのような変化があるかは定かではありませんが、都市部の総合病院精神科としての信頼や、身体合併症医療への期待も高く、近隣のクリニックとの連携も更に必要性が高まると思います。このメンバーが、あるいはその志を引き継いだものたちが、難しい課題に対しても真摯に向き合い、解決し続けていくことを願っています。

司会：次世代の育成・未来への希望や心と身体をシームレスにつなぐ医療の進化とともに、いつの時代も変わらない温かい心のふれあいを大切にする先生方の思いが強く伝わって参りました。本日は貴重な時間をありがとうございました。

Doctor's Voice

精神科は何か特別な病気を診る科ではなく、不眠や不安、抑うつ、もの忘れなど、誰もが抱えうる“脳とこころの不調”に向き合う診療科です。また、人がその人らしく生活していくうえで生じる、生きづらさや苦しさに向き合う診療科でもあります。

薬による治療だけでなく、身体の病気、社会環境にも目を向けて、一般科の先生、看護師、公認心理師、精神保健福祉士などと連携しながら『生活を支える医療』を提供して参ります。

精神科は『最後の砦』と思わず、何か気になることがありましたら、早い段階でご相談していただければと思います。



精神科院長
たにむかい さとし
谷向 知 医師